

さんのう原点回帰 ～伝統から学ぶ単位クラブ活動～

校内農業クラブ員が農業クラブを理解し、一丸となって活動を盛り上げるためには

東北ブロック 青森県立三本木農業高等学校

植物科学科	3年	堀内	幸呼
動物科学科	2年	畑中	凜
動物科学科	3年	相馬	未来
農業経済科	3年	大久保	莉里華
農業経済科	3年	田中	由紀
農業経済科	3年	木村	栞奈
生活科学科	3年	沢目	皐月

1 平成28年度東北ブロック発表課題について

昨年11月、役員となった私たちは“さんのう農業クラブ”67年目の歴史を受け継ぎました。第1回定例会で、来年度の発表課題である“校内農業クラブ員が農業クラブを理解し、一丸となって活動を盛り上げるためにはどのようにしたらよいか”について議論した結果、「まず役員が農業クラブへの理解を深めるべき」という意見にまとまりました。

そこで複雑な要素である農業クラブを構成要素に分け、単純化した各要素を理解することで全体の理解を深める“分析的理解”をもとに、来年度の活動目標を立てることにしました。様々な角度から“農業クラブ”を見つめ直し、古き伝統を新たな発展につなげる私たち“さんのう農業クラブ”の活動をご紹介します。

2 “農業クラブ員”の理解

クラブ員の実態を知るため、地域分会でアンケートを実施。その結果、「あなたの身近にいる三農卒」という質問に、父や母、兄弟など“核家族”で占める割合は合わせて約30%。これに、祖父母や親戚など“身内”を合わせると、50%を占めました（図1）。

この背景には、農業高校特有の理由があります。卒業生が集まり、母校への想いと結束を深める“三農同窓会”。その中で頻繁に出る“三農魂”という言葉は、母校への“帰属意識”を表し、卒業生や在校生同士をつないでいます。

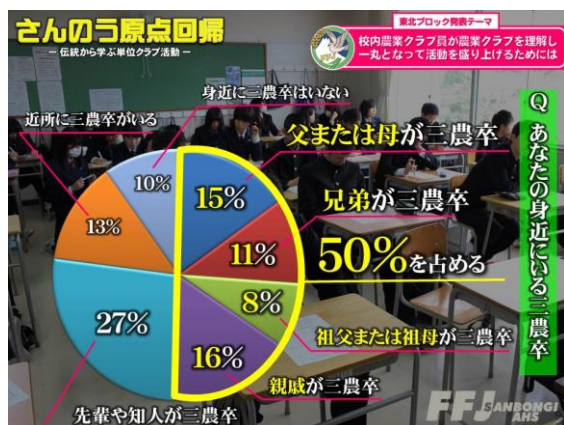


図1

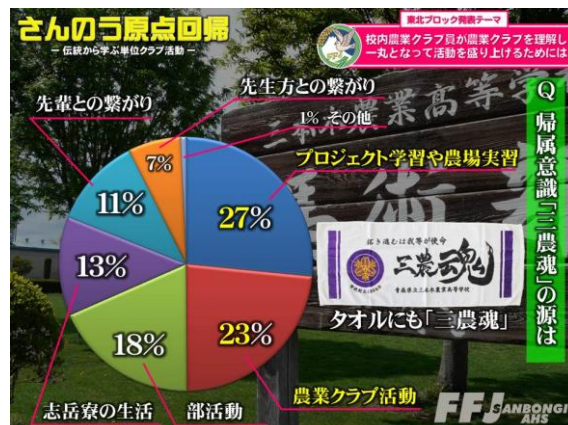


図2

「帰属意識の源は」という質問に、“プロジェクト活動や農場実習”などの日常的な学習活動が27%、“農業クラブ活動”が23%でした。帰属意識の大半は、農業高校ならではの活動で築かれていたのです(図2)。

以上をまとめると、①帰属意識は、親子、兄弟、卒業生やクラブ員同士をつないでいること、②帰属意識は、農業高校ならではの活動を通して築かれていることが分かりました。

3 “農業クラブ活動”の理解

主な農業クラブ活動には、古い歴史と伝統があり、校風が生かされていることが特徴です。「あなたが好きな農ク活動」という質問に、“全校田植え”が28%、“プロジェクトオブザイヤー”が24%となりました(図3)。

全校田植えは、生徒と先生が一致団結し、学科の誇りをかけた熱い戦いとなります。プロジェクトオブザイヤーは、年間最優秀プロジェクトを決める祭典で、研究発表の他にも、寸劇や自作動画の上映、仮装した先生が受賞プレゼンターで登場するなど、生徒と先生が一つになり、イベントを作り上げています。

これらの活動の魅力を集計すると、共通する魅力は、“一致団結”や“一体感”など人と人のつながり“連帯感”でした(図4)。

“連帯感”は、日常的な学習活動でも築かれます。前出のアンケート結果では、これらの活動が最も“帰属意識”の源となっており、この連帯感が帰属意識を生み出していると考えられます。

この結果を基に、弘前大学教育学部との合同ミーティングを開催。森本先生は「三農は、生徒と先生の距離が近く、高校というより一つの共同体で、精神的なコミュニティを作っている」と分析されました。生命(のうぎょう)を通した人と人のふれ合いが、一つの拠り所を作っているようです。

以上をまとめると、①クラブ員が魅力を感じる活動は、共に学び、共に楽しみ、連帯感が得られるもの、②農業クラブ活動は、生命(のうぎょう)を通して、人と人がふれ合う機会を提供していることが分かりました。

4 “単位クラブ”の理解

三農は、創立118年目を迎える、歴史と伝統のある学校です。三農がある十和田市は、その昔「三本木原」と呼ばれ、樹木や民家が一つもない無益の土地でした。

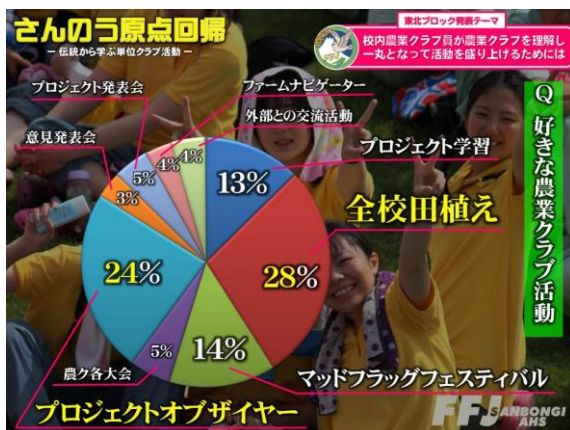


図3



図4

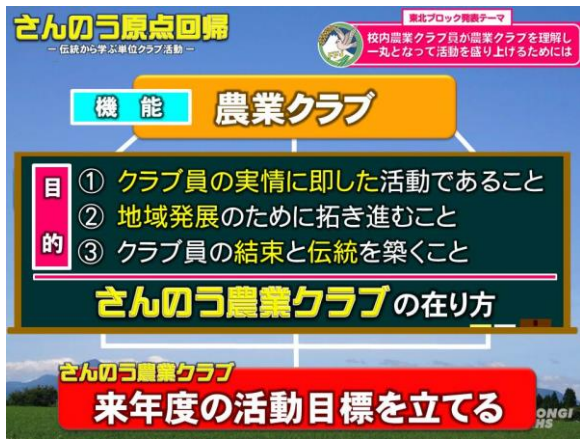


図 5



図 6

この土地に、人工河川“稲生川”を引いたのが、新渡戸傳です。無益の土地に命を育む水が流れ、緑豊かな十和田市が築かれました。

そして、先駆者の開拓魂は、三農の校歌に“使命”として刻まれています。稲生川完成から40年後、この地に誕生した三農は、国の農業を支え、そして“三本木”の名と“開拓魂”を伝承することが使命となりました。

一方、単位クラブの歴史も古く、県連盟設立と同年に誕生。農業クラブの機関誌である『鋤人』は、単位クラブが歩んできた66年の軌跡です。また、全国大会での最優秀賞受賞は、通算26回と全国トップレベルです。

以上をまとめると、①三農は、“三本木”の名と、“開拓魂”を伝承し、地域発展のため“拓き進む使命”があること、②さんのう農業クラブには、先輩方が築いた輝かしい伝統と実績があること分かりました。

5 “農業クラブ”の理解と活動目標

各要素の分析的理解をまとめると、農業クラブとは、①クラブ員の実情に即した活動であること、②地域発展のために拓き進むこと、③活動を通し、クラブ員の結束と伝統を築くことを目的とした“機能”であり、これが“さんのう農業クラブ”の在り方だと結論付けました（図5）。

以上から、来年度（平成28年度）の活動目標は、三農生の、三農生による、三農生のための、農ク活動、ズバリ「やっちゃえ、さんのう！！」。先ほど掲げた3つの目的を果たすため、クラブ員が様々な“学び”を通して、多くの人と出会い、互いに学び合い、そして、母校や郷土を愛せる活動を目指しました（図6）。

6 活動実績①「農業クラブ活動」

まずは農業クラブ活動を「やっちゃえ、さんのう！」。

12月のプロジェクトオブザイヤーでは“クラブ員を知る”をテーマとした番組を制作。クラブ員の意外な一面を紹介するなど多くのクラブ員が主人公となった企画は大好評！

今年1月、編集を始めた機関誌『鋤人』。全クラブ員の写真を掲載するなど、クラブ員が手に取りたい機関誌に仕上げました。また“さんのう伝統文化遺産”として伝統行事を特集。過去を紐解き、現在を記し、未来へ伝えることも私たちの使命です。

今年5月の全校田植えは、特別ゲストに、エドグレンハイスクール、盛岡農業高校の皆

さんを招待。開会式は、日本語と英語の“二か国語同時進行”に挑戦。生活科学科は、ゲストとの合同チームを結成、見事な連携で第3位に入賞！

マッドフラッグフェスティバルは、募集広告の効果で、出場者が倍増！出場者は、泥にまみれ、笑顔でいっぱいになりました。ゲストの昼食は、三農オリジナルのごんぼ丼で“おもてめし”。今回の活動から“一期一会”の心と、その大切さを学びました。

7 活動実績②「プロジェクト活動」

続いて、プロジェクト活動を「やっちゃえ、さんのう！」。

植物科学科は手芸部と連携し、地元の消えゆく伝統工芸品“きみがらスリッパ”を守るため、生産組合協力のもと、三本木原60年の歴史と手仕事の技を継承中！

動物科学科は、犬や猫の殺処分ゼロを目指した“命の花プロジェクト”を広めるため、県内外イベントでの発表や、鉢花の配布活動を継続中。滝川クリステルさんや卒業生協力のもと、地道な活動が実り、書籍化、そして…ついに映画化が決定！

農業経済科は、コンビニチェーン「ローソン」とのコラボ企画「三農MO・MOパン」が大好評。三農産の米粉や牛乳、県産の桃ジャムを使った地産地消型の商品として、再販売を願う声が後を絶ちません！

生活科学科は、地元の特産品“ゴボウ”の消費拡大を目指し、ご当地グルメ“ごんぼ丼”を開発。卒業生の紹介で、地元大学との共同開発が実現。オープンキャンパスでの試食会“三農カフェ”は大好評でした！

8 今後の課題と取り組み

今後の「やっちゃえ、さんのう！」。

1つ目は、人気の無い活動を改善する“農ク活動、ビフォーアフター”！その第一弾は、現在のプロジェクト発表会を、クラブ員が“学び会い”、“学び合える”ポスター発表会へのリニューアル。三農生にマッチした活動にする予定です！

2つ目は、生活科学科が手掛ける“ワークウェアプロジェクト”。来年度で廃止となる生活科学科が、学科の歴史を形に残すため“クラブ員が着たい実習服”を提案。これに賛同した大手ジーンズメーカーの“Lee JAPAN”が全面協力。先日、本校で行われた調印式は、全国初の試みとして、多くのマスコミが注目。生活科学科の歴史とクラブ員の結束を形にしたワークウェア、今年の秋に完成予定です！

9 終わりに

今年4月、地元新聞に本校クラブ員の投稿が掲載されました。「動植物を育てる私が、本当は農業を通して育てられているのかもしれない。いつか私も卒業生として大きな誇りを持ち、後輩に勇気を与える先輩になりたいと思う」。この記事を読み、私たちは、農業クラブの在り方、そして“三農生が三農生を生み出している”ことを確信しました！

それぞれの学校に歴史があります。歴史に息づく伝統があります。古きを知り、新しきを知ることは、私たち単位クラブが歩む道しるべとなりました！

今こそ、さんのう原点回帰！未来の農業クラブのために！！